

悪途東Ⅱ遺跡

一分譜住宅造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2012

安中市埋蔵文化財発掘調査団

悪途東Ⅱ遺跡

一分譜住宅造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2012

安中市埋蔵文化財発掘調査団



要途東II遺跡全景（写真上が北）



悪途東II遺跡全景（南から撮影。左奥がK-1号墳、手前右はK-3号墳）



悪途東II遺跡K-1号墳全景（南から撮影）



悪途東II遺跡K-3号墳全景（南から撮影）



悪途東II遺跡K-3号墳全景（南東から撮影）

序

群馬県の南西部に位置する安中市は奇峰妙義山や清流碓氷川などを有し、四季折々の自然豊かな田園都市です。また、童謡「もみじ」の舞台ともなった碓氷峠は、古代においては畿内と東国を結ぶ東山道、江戸時代には江戸と京都を結ぶ中山道、そして明治時代には日本の近代化を担った鉄道施設が設けられ、常に交通の要衝として多くの人やモノ、文化が行き交い栄えてきた地であります。このような、先人たちが遺した素晴らしい歴史・遺産を愛し、そして未来へ正しく残し伝えていくことは現代を生きる私たちの大切な役目と考えています。

さて、本書において報告いたします悪途東II遺跡は市の中心部、原市地区にあります。中でも、碓氷川左岸の中位段丘上に位置する本遺跡は、南に碓氷川を見下ろせる場所に立地しています。遺跡周辺では、過去の調査等により古墳時代後期から終末期を中心とした古墳群の存在が知られており、本遺跡もこれらの一、「悪途東古墳群」であると考えられます。今回の発掘調査では4基の古墳の存在が明らかになりました。うち1基は方墳で古くに盗掘を受けたものの、刀や鉄鏃といった武具、轡などの馬具、装身具などが見つかり、この古墳群の性格を明らかにするための大きな手掛かりとなりました。本報告が学術分野に寄与するだけでなく、郷土資料としても広く活用されることを願って止みません。

最後になりましたが、発掘調査にご協力いただきました株式会社高橋ハウジング様、調査に従事していただいた方々、有益なご指導・ご助言をいただいた多くの方々に厚く感謝を申し上げ、序といたします。

平成24年12月

安中市埋蔵文化財発掘調査団

団長 中澤 四郎

例　　言

- 1 本書は株式会社高橋ハウジングが計画した分譲住宅造成工事に伴う悪途東II遺跡（略称C-25）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。なお、本遺跡は昭和63年度に調査を実施した悪途東遺跡の隣接地である。
- 2 悪途東II遺跡は安中市原市字悪途東492番地1他に所在する。
- 3 確認調査については国庫補助金・県費補助金により、安中市教育委員会（学習の森文化財係）が行った。本調査および資料整理は原因者負担により、安中市教育委員会が組織する安中市埋蔵文化財発掘調査団（団長 中澤四郎）が委託を受け、それぞれ平成24年度に実施した。
事務局 佐保信之（副団長） 佐藤房之（事務局長）
藤巻正勝（事務局次長） 原久美子（経理担当）
菅原龍彦（確認調査・発掘調査・資料整理担当）
- 4 確認調査は平成24年4月10・11日に、発掘調査は平成24年4月13日から5月28日までの間に実施した。資料整理は発掘調査終了後、平成24年11月30日まで断続的に行った。
- 5 本書の編集・執筆は菅原が行った。資料整理は菅原が中心に行い壁伸明（安中市行政事務嘱託）がこれを補佐した。
- 6 遺構写真の撮影は菅原が行い航空写真撮影および遺構測量は株式会社測研に委託した。遺物写真の撮影は壁が行った。
- 7 発掘調査の記録・出土遺物は安中市教育委員会が保管している。
- 8 発掘調査および遺物整理の期間中、次の方々にご指導・ご協力をいただいた。記して感謝の意を表します（敬称略・順不同）

青木 弘 秋元 陽光 加部 二生 志村 哲 寺田 良喜 長井 正欣 萩原 恒一
 三浦 京子 右島 和夫 横澤 真一

9 発掘調査・整理作業從事者

今井 保美 岩井 英雄 竹井 五郎 多胡 栄夫 遠間 宰吉 野口 義則 村椿 健
 宇佐美 瑞一 鬼形 敦子 鬼形 栄子 小野 育 染谷 純子 萩原 静夫 萩原 治枝
 中里 徳子 廣上 良枝

凡 例

- 本書中で使用した地図は安中市平面図（1/10000）である。
- 各遺構図の方位記号は国家座標の北を表す。座標系は世界測地系である。
- 遺構断面図、等高線に付した数字は標高を表す。
- 遺構実測図の縮尺は全体図1/200、石室展開図1/60を基本としている。これ以外については図中に縮尺を記した。
- 遺物実測図の縮尺は須恵器・埴輪1/4、鉄製品1/2を基本としている。これ以外については図中に縮尺を記した。
 遺物写真の縮尺は遺物実測図に準ずる。
- 土層説明中の記号・略称は次のとおりである。

色調<	:	より明るい方向を示す（暗<明）
しまり・粘性:	○…あり ○…ややあり △…あまりない ×…なし	
混入物の量 :	○…大量 (30~50%) ○…多量 (15~25%) △…少量 (5~10%) ※…若干 (1~3%) ×…なし	
混入物 :	R P…ローム粒子 (溶け込んだ状態) R B…ロームブロック (固まりの状態) Y P…浅間板鼻黄色軽石	
- 土層名称および量の基準は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』による。
- 本文および図表中に用いる火山灰の名称は以下の略称を用いた。（括弧内は降下年）

浅間A軽石 (1783年) … A s - A	浅間B軽石 (1108年) … A s - B	浅間板鼻黄色軽石… A s - Y P
-------------------------	-------------------------	---------------------
- セクション図中の灰色トーンはA s - B堆積を、斜線トーンはロームを多量に含む埴丘盛土を表す。

目 次

序・例言.....	(1・2)
凡例・目次.....	(2・3)
第1章 調査に至る経緯.....	(4)
第2章 調査方法と経過	
(1) 調査の方法.....	(4)
(2) 発掘調査・資料整理の経過	(4)
第3章 遺跡の地理・歴史的環境	
(1) 地理的環境.....	(5)

(2) 歴史的環境	(5)
(3) 既往の発掘調査	(5・6)
(4) 調査地の基本層序	(6)
第4章 検出された遺構と遺物	
(1) 遺跡の概要	(7)
(2) 遺構の概要	(7～12)
第5章 成果と問題点	(25・26)
写真図版	
抄録	

挿 図 目 次

第1図 悪途東遺跡全体図（昭和63年度調査時）	(5)
第2図 悪途東II遺跡基本土層模式図	(6)
第3図 悪途東II遺跡の位置と周辺古墳	(6)
第4図 悪途東II遺跡遺構全体図および調査対象区域図	(13)
第5図 悪途東II遺跡調査対象区域図	(13)
第6図 悪途東II遺跡平面図およびセクション位置図	(15)
第7図 K-1号墳セクション図および土層注記	(17)
第8図 K-3・2・4号墳セクション図および土層注記	(18)
第9図 K-1号墳石室展開図	(19)
第10図 K-3号墳石室展開図	(20)
第11図 K-1号墳出土遺物実測図	(21)
第12図 K-3号墳出土遺物実測図（1）	(22)
第13図 K-3号墳出土遺物実測図（2）	(23)
第14図 K-3号墳出土遺物実測図（3）	(24)

表 目 次

第1表 K-1号墳出土遺物観察表	(24)
第2表 K-3号墳出土遺物観察表①	(24)
第3表 K-3号墳出土遺物観察表②	(25)
第4表 K-1・3号墳石室規模計測表	(25)

第1章 調査に至る経緯

平成24年4月2日、株式会社高橋ハウジングより分譲住宅造成工事に係る埋蔵文化財の照会があった。事業計画地には周知の古墳（市No1066、1247、1248）^{註1}が存在しており、その隣接地については昭和63年度に発掘調査を実施し（悪途東遺跡）^{註2}、古墳の周堀を検出している。今回の開発にあたり、過去の調査データから工事の影響が古墳に及ぶことは避けられないため、工事を実施する場合には埋蔵文化財の保存措置を講じる必要があることを4月3日、同社へ回答した。

その後、事業者側と安中市教育委員会との間で埋蔵文化財の取り扱いについて協議を進めてきたが、工事計画の変更是困難であるとのことから、事業計画地内における遺跡の性格を把握するための確認調査を実施し、その結果により再度、埋蔵文化財の取扱いについて協議することとなった。

平成24年4月9日、事業者側から確認調査依頼書や法93条届出等の必要書類が提出された。これを受け4月10・11日の両日に確認調査を実施した。その結果、周知の古墳3基（K-1・K-2・K-3）に加え、新たに古墳1基（K-4）の存在を確認したため再度、事業者側と協議を行った。その結果、工事により遺構が影響を受ける部分を対象に発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずることとなった。法93条届出については4月11日付けで「発掘調査」の指示を出した。その後、発掘調査に向けての協議・事務調整を行い、4月12日付で同社と、市教育委員会が組織する安中市埋蔵文化財発掘調査団（団長・市教育長）の間で埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結し、4月13日より調査を開始した。

註1 安中市教育委員会 2011『安中市道路分布地図』

註2 安中市教育委員会 1988『悪途東遺跡』

第2章 調査方法と経過

（1）調査の方法

発掘調査の方法は工事計画図を基に調査範囲を決定した。基準点および水準点は工事用測量杭等を利用した。調査の流れとしては、先ずバックホーにより表土を掘削した後、鋤籠等を用いて人力で遺構確認を行い、遺構精査を行うというものである。精査した遺構については適宜、35mmリバーサルフィルムと記録用デジタルカメラで撮影を行った。土層断面図以外の遺構測量および空撮写真は株式会社測研に委託して行い、必要な測量データはデジタル形式で記録した。

（2）発掘調査・資料整理の経過

確認調査はバックホー（0.6m）により、幅1.1mのトレーナーを3本掘削した。周知の古墳3基については現状でも墳丘の高まりが確認できたことから、地表下にある周堀の範囲を調べることを目的とした。結果として、表土下のA s-B下において古墳の周堀を検出し、また新たな古墳1基の主体部を確認した。確認調査において古墳の墳丘および主体部、周堀の存在が想定される範囲について、工事では全て削平する計画となっており、また4基の古墳がかなり近接して築造されていることから、工事予定地の西側ほぼ全体を対象に本調査を実施することとなった。

本調査では、古墳の墳丘部分については表土および切り株をバックホー（0.6m）で除去した。また、部分的に石室構築材と考えられる石が表土上に露出していたこともあり、人力で表土を掘り下げた部分もあった。

周堀はバックホーで表土を除去し、A s-B確認より下は人力にて掘削を行った。出土遺物は水洗を行った後、遺構略称・遺構名等の出土位置を注記した。注記を行った遺物については器種分類および計測・計量を行い、各種台帳を作成した。金属製品については銷取り等のクリーニングを行い、計測・計量、台帳作成を行った。資料整理及び報告書作成・編集にあたってはパソコンおよびデジタルカメラを使用し、遺構図トレス、データ集計、遺物実測・同トレス、遺物写真撮影や図版作成などを行った。

第3章 遺跡の地理的・歴史的環境

(1) 地理的環境

安中市は関東平野の周縁部である群馬県西部に位置し、市の西側は長野県に接している。市の西部から北部にかけては山地が広がり、それぞれの山地から流れる河川沿いに丘陵並びに段丘が形成される。市の中央部には碓氷峠付近を水源とする碓氷川が市域を南北に分断する様に流れている。碓氷川の支流としては北に九十九川や増田川、南に柳瀬川などがあり、それぞれ上位段丘（横野台地）、中位段丘（安中・原市台地）、下位段丘（磯部地区）といった河岸段丘が発達する。

また、市の北東や南東部には秋間丘陵、岩野谷丘陵、松井田丘陵といった丘陵や山地が広がっている。特に、市の北東に位置する秋間丘陵の周辺には火成岩の一つである溶結凝灰岩が東西に分布しており、古墳時代から横穴式石室の構築材として築造二子塚古墳（同市築瀬）や觀音塚古墳（高崎市八幡町）をはじめとした碓氷川沿岸の有力古墳に用いられている。碓氷川流域の段丘疊層には当地域の古墳の葺石として広く用いられる安山岩自然礫が分布している。

悪途東II遺跡は碓氷川と九十九川に挟まれた中位段丘（安中・原市台地）の南端近く、碓氷川の崖線上に立地する。遺跡地の標高は約199～195mであり、南東方向へ緩やかに傾斜している。なお、碓氷川の河床面との比高差は約35mを測る。

(2) 歴史的環境

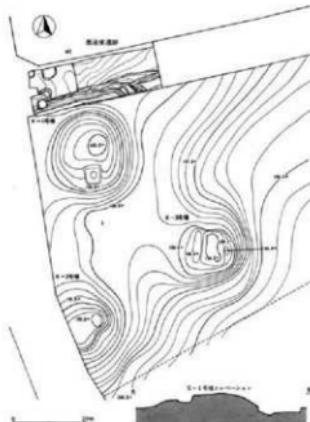
悪途東II遺跡は縄文時代の埋蔵文化財包蔵地（市No278）および周知の古墳（市No1066、1247、1248）として市遺跡台帳に登録されている。また、過去の市道新設改良工事では本遺跡と隣接する古墳（市No1066）の周囲を調査している。

悪途東遺跡および悪途東II遺跡周辺は悪途東古墳群の範囲内にあり、昭和10年に行われた県下一斎古墳調査の結果をまとめた『上毛古墳総覧』には古墳4基（旧原市町15・16・17・18号墳）があったとされている。しかし、昭和63年の調査時には5基が確認できるとされ、さらに地域の伝承などによると他にもかつて2基の古墳が存在しており、少なくとも7基以上の円墳・方墳から構成される古墳群であったという。

周辺に目を向けると、本遺跡の東約500mの碓氷川左岸崖線上にはかつて旧原市町19・20・21号墳（天王西古墳群）があったが、現在は削平されている。さらに本遺跡の東約1kmには給人畠古墳群が位置する。また、西約500mには旧原市町14号墳（大砂山古墳）がある。いずれも未調査ではあるが、これらは墳形や表裏遺物からいずれも古墳時代後期～終末期の築造と考えられる²¹⁾。一方、碓氷川の一枝流である九十九川に注ぐ秋間川沿いの山間地（秋間丘陵）においても7世紀代の古墳が点在し、その成立背景には同時に操業していた秋間古窯跡群や、秋間産の瓦を使用し造営された山王庵寺（前橋市總社町）と縁の深い總社古墳群との繋がりが指摘されている。

(3) 既往の発掘調査

本遺跡の北に隣接する悪途東遺跡は昭和63（1988）年7月、市道584号線（旧悪途東線）道路の新設改良工事に伴って発掘調査が行われた。幅6m、長さ18mの細長い調査区において、K-1号墳（旧原市町17号墳）の北側周囲を検出した（第1図）。調査報告書によるところこの周囲は東西に直線状に延び、北東および北西部で急に南へ曲がっている。なお、墳の断面は緩やかなU字状を呈しており、覆土にはA-s-Bが水平堆積していたことから、平安時代後期にはすでに埋没していたと考えられる。

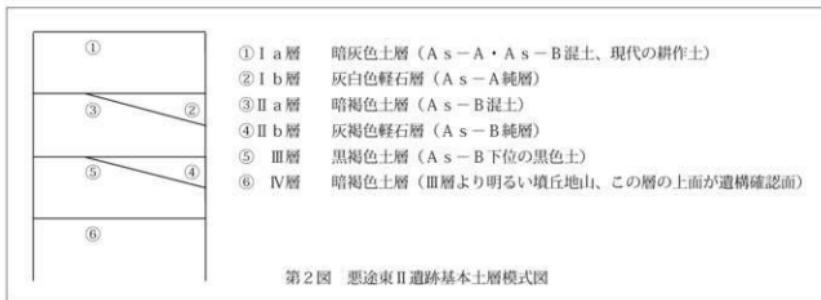


第1図 悪途東遺跡全体図(昭和63年度調査)

報告書では、K-1号墳の墳形は周堀が急に曲がる点や現存する墳丘の形態等から方墳であり、須恵器等の出土遺物から終末期古墳と位置付けられている。また、古墳以外にも調査区内で黒曜石の剥片や縄文土器（加曾利E式期）が採集されており、さらに本遺跡の北東で縄文時代前期から中期の遺物散布が確認できることから、周辺には当該時期の遺跡が存在したとされている。

（4）調査地の基本層序

悪途東II遺跡の土層堆積状況はおむね前回調査のものと通している。近現代の人为的な擾乱に加え、調査前の状況が竹林だった事もあり、根による擾乱が全体的に激しく自然堆積を確認できる部分は限られていた。しかし土層の厚い場所ではA s-AおよびA s-Bを含むI a層（表土・①）の下にI b層（A s-A純層・②）、A s-B混土層（③）、II b層（A s-B純層・④）、更にⅢ層（黒褐色土層・⑤）、IV層（褐色土層・⑥）と続く。なお、遺構確認はIV層上面で行った。各層の深度は①上面を基準とした場合、②・③上面で約25cm下、⑥上面では約100cm下である。



第3図 悪途東II遺跡の位置と周辺古墳（1/20,000、安中市平面図をもとに作成）

- | | |
|-------------------------------|-----------------------------|
| ① 惑途東・惑途東II遺跡（惑途東古墳群・4基） | ② 旧原市町15号墳（惑途東古墳群・市No.1067） |
| ③ 安中市C K-8古墳（惑途東古墳群・市No.1068） | ④ 天王西古墳群（旧原市町19・20・21号墳） |
| ⑤ 大砂山古墳（旧原市町14号墳・市No.1069） | ⑥ 安中市C K-11古墳（市No.1071） |
| ⑦ 築瀬二子塚古墳（旧原市町13号墳） | ⑧ 築瀬首塚古墳（旧原市町12号墳） |

第4章 検出された遺構と遺物

（1）遺跡の概要

惑途東II遺跡は碓氷川左岸に形成された中位段丘南端の崖線付近に立地し、調査区は北西から南東方向へ向かって緩やかに傾斜している。調査区の北西にあり最も標高の高い所に位置するのが、前回の調査で周堀の一部を確認したK-1号墳（旧原市町17号墳）である。同墳の南にはK-2号墳（旧原市町18号墳）が、南東にはK-3号墳（旧原市町16号墳）がそれぞれの周堀が重複するかのように、ごく狭い範囲に隣接している。

調査前は立ち入る事が出来ないほど一面に竹が繁茂しており、外部から中の様子は全く見えない様な状況であった。重機等による伐採・抜根作業により、調査開始時には比較的良好な状態で墳丘が残存している事が確認できた。一方で、残念な事にかなり広範囲に渡ってK-1号墳の北側、K-2号墳の西側は市道によって破壊されていた事も分かった。K-1号墳については『上毛古墳綜覧』に「大サ三六尺・高サ一〇尺・石櫛開口ス」との記録が残っている。また、K-1号墳およびK-3号墳の墳頂付近には天井石と思われる幅1m以上の自然石が幾つか散見された。近くに同規模の窪みも見られた事から、石室の一部は古くから陥没していたものと予想された。

今回の調査では、K-1号墳とK-3号墳についてはほぼ全面的に調査を行った。K-2号墳については墳丘の西半分が市道と接しており、掘削によって道路際の擁壁を破壊する危険性があったため墳丘の一部を人力で掘削したところ、石室は既に形状をとどめないほど搅乱を受けていた事が分かった。これららの事からK-2号墳の調査は周堀部分を中心に行い、墳丘部分については重機による伐根後の現状を観察するに留めることとした。

K-4号墳は『上毛古墳綜覧』に記載されていないが、遺構の検出位置から前回の調査時に「古墳があったと推定される部分」として「5号墳」に比定されていた古墳と考えられる。墳丘のほとんどは前回の調査以前に敷設されていた市道により破壊されており、石室入口付近の側壁および裏込め石が若干残っている程度であった。

（2）遺構の概要

① K-1号墳（旧原市町17号墳）の調査

調査前から天井石は陥没し墳頂部は大きく凹んでいたが、K-2・K-3・K-4号墳と比較して墳丘の残りは良好であった。方墳の可能性が指摘されていたが、調査の結果、自然石乱石積の両袖型横穴式石室を主体部とする径12.5mの二段築成の円墳である事が分かった。墳丘の周囲には周堀をめぐらせるが、石室正面に近い南東から南、南西部分については搅乱が激しく確認できなかった。また、石室入口の前には下段葺石の推定延長線より外側に別の石列が確認できる事から、かつて前底部が敷設されていたものと考えられる。

天井石は奥壁に架かる1石以外は石室内に転落しているか、若しくは失われていた。石室内は全体に渡って搅乱が及んでおり、床面は小礫を敷き詰めた柏床面より下の扁平な石敷に至るまでほとんど残っていない状況であった。また、床面近くでA s-Bの水平堆積が部分的に確認でき、12世紀初頭までに天井石の一部は外れていたようである。玄室内から副葬品等の出土は一切なく、羨道中央部の閉塞石覆土中から馬具（鉸具）が1点出土したのみであった。石室および葺石の転石・覆土中から若干の須恵器や埴輪片が見つかったが完形となるものはほとんどなく、多くは墳頂部から転落したものと考えられる。これら遺構・遺物の特徴から本墳は7世紀後半の築造と推定される。

墳丘および外部施設

墳丘の盛土は築造当時の地表面から直接構築されている。断ち割りによる観察から大きく分けて、①当時の地表面の上に黒色土を主体とした盛土を行う（その際の高さは地表面から約80cm、裏込め被覆のおよそ2/3の高さまで達している）。②その盛土の外側にローム粒・ロームブロックが混ざった黒褐色あるいは黄褐色の土と、前述の黒色土をやや外側へ傾斜するように交互に積んでいく、という工程の盛土構築が行われている事が分かった。なお、黒色土主体の盛土、黒色と黄色土の互層状の盛土とともに版築が行われた様な痕跡はなく、粘土等も確認できなかった。

これらの盛土は恐らく周堀を掘削する事によって得られた土で構築されたと考えられる。墳丘の南から西側にかけての周堀は攪乱の影響で確認できなかったが、墳丘東側の周堀の規模は上端で幅約1.6~3.5mと不整形である。深さは約1.0~1.2mを測る。なお、前回調査における所見では北側周堀の幅は上端で1.4~1.6m、深さ0.4~0.9mと報告されている。

周堀の断面を見ると旧表土の2~30cm下でローム層まで達しており、周堀の壁及び堀底はほぼ完全にローム層を掘り込んでいる事が分かる。これらの事から、仮に周堀が全周、あるいは石室正面周辺を除く馬蹄形状に掘られていたとしても、本墳の盛土を貯う土量を確保するのは可能であると考えられ、またローム粒等が混ざった黄褐色土が盛土に用いられる理由も理解できる。ただし、盛土用の土を仮置きしていたと考えられる様な土坑等の遺構は確認されなかった。周堀の覆土上層にはA s-Bがほぼ水平に堆積している事から、周堀は12世紀初頭までにほぼ埋まっていた事が分かる。

墳丘の裾部は周堀の墳丘側掘り込み部分ではなく、周堀に沿う形で約2m内側（墳丘側）に配置された下段葺石の根石部分からはじまっている。葺石は人頭大のものが多く、根石については一回り大きい石材を使用する傾向がうかがえる。下段葺石については遺存状態の良い部分では根石を含め2~3段残っていた。一方、上段葺石は墳丘東側で3~5段、残りの良い西側では3~8段ほど残っていた。なお、調査区西端の上段葺石の根石と、凡そ対角線上に位置する墳丘東側の根石付近で40cm近くの高低差がある。本墳は正面から見るとやや東に傾いた格好である事から、墳丘盛土の構築に関して事前に旧地表の切り盛り等の大規模な地業行為は行わず、或る程度当時の地形なりに施工していったものと考えられる。

葺石の覆土中には転石と共に須恵器の甕や碗、壺などの破片が散見された。出土位置や接合関係から、これらは主に墳頂部から転落したものと考えられる。根石の配置はおよそ円形を描くものと推測されるが、石室正面部分の石列のみ下段葺石の延長線よりも外側に位置しており、これは前底部の残骸であろうと推定される。葺石の石材は上・下段とともにやや扁平な安山岩系の自然石が用いられており、これらは本遺跡の崖下に流れる碓氷川の川原石を利用したものと考えられる。

墳丘の規模は盛土が確認できる下段葺石の根石部分で径12.5m、上段葺石の根石部分では径10.5mである。推定ではあるが周堀の内側上端（基壇端）から測ると径18m、周堀外側の掘り込みから測ると径24m程度である。

主部体（第9図）

自然石乱石積の両袖型横穴式石室であり、玄室の主軸はN-12°-Wとしている。既に奥壁から玄室にかけての両側壁の大半と、天井石について奥壁に架かる1石以外を失っていた。床面についても狭道、玄室共に大きく攪乱を受けており、元の棺床面であった小円環敷きと、その下に敷かれた扁平な川原石敷きが部分的に残る程度であった。なお、時間等の制約から石室の解体や裏込めの詳細な調査等は行っていないが、石室床面（約197.5m）と、盛土と旧表土の境目（奥壁付近で約197.6m、石室入口付近で197.4m）のレベルは凡そ一致している事から、石室構築の順序としては旧表土中に墓櫛（石室掘り方）を掘り窪めた後に整地等の若干の地業行為を行い、奥壁を配置したと考えられる。統いて、奥壁寄りの側壁から徐々に玄門に向かって根石を配置していくと思われる。これは、奥壁近くの側壁根石は比較的大型なのに對し、玄門（袖石）近くでは明らかに大きさの異なる、調整用と思われる石（合石）を配している為であり、狭道についても同様の傾向が見られる³²。

石室の全長は約6.9mで狭道長は3.8m、同幅は0.8mを測る。玄室長は4.1m、同幅は袖石付近で1.1m、奥壁付近では1.4mである。石室の平面形をみると、玄室右壁は袖石から奥壁まで真っ直ぐであるのに対し左壁はやや外側に開きながら奥壁に向かっており、所謂「羽子板」状を呈する。

漢道部の壁体は破壊が著しいが、基本的に小口方向を石室内に向ける様に積まれている。前述の通り1段目は大型の腰石を配し、2段目以上はやや小振りな石を載せている。漢道には拳～人頭大の閉塞石が詰められていたが、攪乱の影響もあり大部分は土砂等と混ざった状態であった。但し、袖石手前部分については石室の主軸に小口面の向きを合わせる形で閉塞石を規則的に積み上げているのが確認できた。袖石については立石ではなく、周囲より一回り小振り且つ細長い石を小口積にする事で表現しており、三段が残存している。

石室内部が大きく攪乱を受けているのは漢道・玄室覆土中にA s - A · Bが含まれている点から明らかであり、床面近くでA s - Bが薄く堆積している状況も部分的に確認できた。これらのことから、本墳は12世紀初頭以前には既に天井石の一部が外され、床面が露出していたと推定される。

石室の平面および側面図を見ると漢道と玄室の境に段差（下がり框構造）がある様に見えるが、この段差は玄室の床石（舗石）の大半が抜き取られた攪乱に由来するものであり、実際は開口部から奥壁までほぼ平坦であったと考えられる。奥壁は幅1.5m以上もある大型の石材を横積みで3段積んでおり、1・2段目は大振りの石、最上段は若干小さ目で扁平な石を乗せている。奥壁と接する左右壁体を見ると「転び」の傾向がみられ、右壁の傾きは床面から3石目までが約5°、4石目以上はより傾きを強め約24°内傾している。一方、左壁は1石目から6石目までほぼ直線的に内傾し、その角度はおよそ12°である。なお、側壁の転びと裏込め被覆の形状（傾き）に注目すると、右側壁の傾斜が変わる3・4石目の裏込めに当たる部分も角度が変わっている。また、この位置は裏込めを覆う盛土の中でも丁度、黒色土主体の土と黒色土・ローム混土の互層土に分かれる墳頂付近のレベルとほぼ対応していることから、石室と裏込め、盛土の構築がリンクしてなされていたものと理解できる。

前庭部

本墳の石室正面は広く攪乱を受けており、明確な前庭の平坦面や側壁等は確認できなかった。しかし、下段葺石列の延長線から約1.5m外側に4mの長さにわたって弧状を描くように石列が残っていた。これらは正面から見て石の長辺の両端が隣の石と接する様に横長に配されており、本来は前庭の先端部分を区画していたものと考えられる。攪乱の影響もあり詳細は分からぬが、本墳の前庭は県内の終末期古墳に通有る、石室入口付近に石を壁状に積み上げる構造ではなく、緩傾斜の地形を利用して台形或いは扇状に敷石を配置する等多少の地業を行う事で前庭としていたと推定される。なお、前庭の周辺から高台付き碗（8世紀半ば頃）の破片が出土していることから、約半世紀に渡って追善供養等の墓前祭祀が行われていたと考えられる。

遺物（第11図）

漢道右壁の閉塞石除去中に壺蓋の鉄具（①）が出土した。攪乱に伴う覆土中であったが本墳石室から出土した遺物はこの1点のみである。②の提瓶は胴部に環状把手をもつ。前庭及び上下段葺石の覆土中から出土した破片同士が接合する事から、墳頂部に置かれていたものと考えられる。③・④の蓋環は外側に幅広のつまみ、内面には僅かなかえりを有する。

⑤の环身と⑥の高台付き碗は共に底部回転系切りである。胎土中に黒色鉱物を顯著に含み、それが融解しコーケス状に発泡する特徴をもつ事から秋間古窯跡群で生産されたものと考えられる。⑦の甕外面にはオリーブ色の降灰釉が掛かり、これも同様に秋間古窯跡群の製品の特徴の一つと考えられる²³。⑧・⑨はそれぞれ埴輪片である。形態や調整の特徴から6世紀後半の所産と考えられるが、本墳に伴うものではない。他にも埴丘覆土中で埴輪片が散見されたが、それぞれの位置関係は離れておりまた完形となるものもない事から、これらは埴丘の盛土に混入していたものと考えられる。

殆どの遺物が石室外出土であるため年代観を掴むのは難しいが、石室の形態はおよそ7世紀後半の様相を示すと捉えられる。一方、遺物としては8世紀前半～半ば頃と考えられるものが中心であり、追葬或いは追善供養に伴うものと考えられる。

②K-2号墳（旧原市町18号墳）の調査

本墳はK-1号墳のほぼ真南約5.5m（K-1号墳前底部の先端から、K-2号墳北側周堀までの距離）に位置する。前述通り西側は市道と接しており、墳丘の西半分は既に破壊されている。また、残存する墳丘の南半分については調査区域外であった為、実際の調査対象は僅かに古墳の北東約1/4程度であった。なお、遺物等は全く確認されなかった。東側でK-3号墳と重複するが、擾乱が激しく新旧関係は不明である。

墳丘および外部施設

全体的に擾乱を受けており詳細不明である。伐根時の土層観察によると、石室の壁石や裏込め石と思われる大小の川原石が土砂とともに不規則に混ざっており、K-1号墳で見られたような黒色土やローム混土層の互層は確認できなかった。これらの事から本墳は既に墳丘から石室床面に至るまで破壊されているものの、周囲の状況や古墳の立地から本来は自然石乱石積の横穴式石室を主体部とする円墳であったと推測され、周堀を含めた径は20m程度と考えられる。

周堀はK-1号墳と同様に直角形を描いており上端の幅は2.5~3.0m、深さは0.6~0.7mを測る。墳丘寄りの覆土中に人頭大の川原石が散見される事から、墳丘には葺石を伴っていたと思われる。なお、K-1・K-3号墳に比べて周堀の掘り込みが浅い点、A s-Bの堆積が確認できない点などから、本墳の周囲はかなり削平されていると考えられる。

③K-3号墳（旧原市町16号墳）の調査

K-1号墳の南東約3mに位置し、また周堀の南西をK-2号墳の周堀と接する2段築成の方墳である。調査前の状況としては、天井石・壁石等の石材や木の根が周囲に散乱し、墳頂部には陥没痕があった。本墳は『上毛古墳総覧』には円墳と記載されているが、前回の調査では方墳の可能性が指摘されていた。今回の調査では、調査区域外である周堀南東部を除いて墳丘のほぼ全体を調査する事ができた。

主体部はK-1号墳と同様に自然石乱石積の両袖型横穴式石室であるが、全長はより短く幅広なつくりとなっており、また石積みも大振りな石を多用するなど時期的には若干後出するものと考えられる。石室内は広く擾乱を受けているが舗石は残存しており、玄室床面近くの左右側壁に円螺と一緒に寄せ付けられた様な形で、人骨片とともに轡や鎧といった馬具や大刀、鉄鎌、耳環などの副葬品が見つかった。なお、耳環は3点確認されており、複数埋葬の可能性が考えられる。

上段の葺石は一辺が直線的に形成されているのに対し、下段は一辺がやや弓形でコーナーは鈍角となっている。周堀の形状は上段葺石の様にきれいな四角形ではなく、下段葺石の形状に近い隅丸方形となっている。また、石室正面には約4mにわたり石列が並んでいる。両端は広く擾乱を受けており詳細は分からぬが、下段葺石でないとすれば或いはK-1号墳と同様に前底部を構成する石列の一節の可能性がある。

墳丘および外部施設

本墳もK-1号墳と同様に旧地表面から墳丘を構築し周堀の掘削を行っているが、周堀と下段葺石との間に明確な平坦面を設けない点は対照的と言える。外部施設のうち、視覚的に最も残りが良かったのは北西から西にかけての墳丘および上・下段葺石列である。墳丘の断ち割りは1カ所のみ行ったが、K-1号墳とは異なり、似たような色合いの黒色土が少なくとも2層、外側へ傾斜するように積まれており、互層状の盛土は確認できなかった。勿論、擾乱の影響で互層状の盛土部分が削られた可能性も否定できないが、盛土と対応するレベルの石室側壁の残存状況を考慮するとその可能性は低いと思われる。調査の都合により、断ち割り部分の裏込め被覆を全て検出する事はできなかったが、天井石に近い、確認できる限り最も上にある裏込め石からほぼ垂直に墳丘を断ち切ったところ、裏込め石は検出されなかった。この事から、K-1号墳の裏込め被覆は床から天井に向かって徐々に窄まる「ハ」の字状に積まれていたのに対し、本墳はほぼ垂直或いは逆「ハ」の字、または「く」の字状に石積みをしていると予想される。

墳丘の裾部については周堀の墳丘側掘り込みがそれに相当する。ただし、K-1号墳とは異なり、周堀と下段葺石との間に平坦面（基壇）は設けず盛土はこの葺石下端から始まっている。石の大きさはK-1号墳とさほど変わらず横積みを

基本とし、1石目には若干大き目の石を置く傾向がある。残存状況についてはおよそ下段葺石が根石を含め1石から4石程度、上段は1石から7石程度である。下段葺石の北西コーナーは、他の葺石に比べて倍以上の大きさがある川原石が縱方向に整然と並べられており、コーナー部における土留めや視覚的・差異をつける意図があったものと推測される。なお、葺石の転石を除去中に覆土中から环や甕といった須恵器片が見つかっているが、いずれも小片で完形になるものはない。

本墳を上から見た場合、上段葺石列のコーナーはきれいな直角を描いているのに対し、下段はやや鈍角で丸みを帯びている。下段葺石列は周堀に直に面しているため少なからず形が崩れている部分もあると思うが、本墳の墳形は築造時から若干歪んだ方墳だった可能性もあり注意を要する。

周堀は調査区外の墳丘南および南東側を除いた部分を調査した。なお、南西側についてはK-2号墳の周堀と接し、南東側は攪乱の影響を受けていたため不明瞭な箇所もあった。周堀の規模は墳丘西側で上端幅2.0~2.4m、深さは0.3~0.5m、北側で同幅2.4~2.7m、深さ0.6~1.0m、東側は不明瞭な部分が多いが同幅約2.5m、深さ0.2m程度であった。また、本墳の周堀と下段葺石（盛土の端部）の間にはほとんど間隔がなく、まるで周堀の内側斜面に葺石が貼り付けられているような印象を受け、両者の間に平坦面を設けるK-1号墳とは対照的である。

墳丘各部分の標高に着目すると、上段葺石の北西コーナー根石付近で196.4m、同北東コーナーで195.2mと1m以上の高低差がある。同様に、下段葺石の北西コーナー根石は195.6m、同北東コーナー根石はやや崩れているもの195m弱と推定され、やはり1m近くの差があるようである。周堀の掘り込みは削平の影響もあり本来の形状を保っているとは考えにくいが、葺石については或る程度元位置を保っていると思われるから、周堀の掘削や墳丘盛土といった本墳に関わる一連の構築についても、やはりK-1号墳と同様に旧地表の傾斜を大きく変更する事なく行われたと考えられる。

本墳の墳丘規模は下段葺石の根石部分で一辺13.5m、上段葺石の根石部分では同9.5mである。周堀外側の掘り込みから測ると一辺約18mである。

主体部（第10図）

自然石乱石積の両袖型横穴式石室である。K-1号墳と同様に安山岩系の川原石を用いるが、平面プランはやや幅広で壁石の石材もやや大き目な印象を受ける。玄室の主軸はN-10°-EでK-1号墳とはほぼ左右対称の位置関係にある。本墳の主体部も広く攪乱を受けており、墳頂部の奥壁寄りの位置に天井石が1石露出していたが、すでに動かされた痕跡があった事と作業の安全面を考慮して調査前に除去した。石室内は崩落した壁石や土砂、雜物等で充填されていたが、羨道の閉塞石は半分程度、また石室床面の舗石は大部分が残っていた。また、側壁の一部には副葬品（鉄鎌）が固着した跡が残っていた。この痕跡から、本来の棺床面のレベルは舗石上面から約20cm上であったと考えられる。

石室の全長は約5.5mで羨道長2.7m、同幅は1.1mである。また、玄室長は2.8mで幅は袖石付近で1.6m、奥壁際でも1.4mあり、K-1号墳と比較するとかなり寸胴な形をしており、平面形はあたかも「逆羽子板」状にも見える。

側壁の最下段には大振りな石を石室内側に最大面が向くように並べ、2段目以上は小口積で積み上げる。また、横方向に目地が通る傾向がある。なお、袖石はK-1号墳と同様に立石ではなく細長い石を小口積みで表現するがやや雑な印象を受ける。羨道の閉塞石は石室入口と袖石付近で確認でき、少なくともそれぞれ3段以上積まれていた。最下段と2段目は石室入口から奥壁を望んだ際に横積み、3段目は小口方向が向くように積んでおり、特に、前者閉塞石は石室入口方向が、後者は玄室側の石の面がきれいに揃っていた。奥壁は大型の石を2段積んでおり、現状の床面（舗石上面）からの高さは約1.6mである。天井石が残るK-1号墳の高さは約1.4mであり、本墳の天井高もそれに近似するものと仮定すれば奥壁は元々2石だったものと想定される。なお、奥壁近くの両側壁はやや「転び」の傾向があるがほぼ垂直に積み上げられており、最下段から徐々に内傾するK-1号墳の積み方とは若干の相違がみられる。

前庭部

K－1号墳と同様に本墳の石室正面も攪乱を受けており明確な前庭は確認できなかったが、僅かに石列が残っていた。上・下段葺石間の平坦面幅と石室入口から石列までの幅がほぼ同じであり、葺石の一部である可能性もあるが、前庭敷石の残骸とも考えられる。

遺物（第12・13図）

石室内の遺物は大きく2ヵ所に分かれて検出された。検出面はいずれも攪乱を受けた床面小円礫の覆土中もしくは舗石直上で、ほぼ同じレベルである。石室内の大部分は床面に至るまで攪乱を受けていたが、幸いな事に側壁付近の遺物だけは辛うじて残っていた。先ず、玄室右袖付近からその前後にかけての側壁に沿った位置で耳環と轡、鎧軸、鐵鑑、人骨片等が見つかった。なお、鐵鑑の向きは統一せず固着し轡は折り畳まれた状態であった。次に、反対側の玄室左袖から玄室の真ん中にかけてもやはり側壁に沿うような形で鉄刀や耳環、刀装金具の一部と思われる金属片等が見つかっている。

石室外出土の遺物としては上段葺石の覆土中などから出土した、頸部に補強体を有する須恵器大瓶がある。これは葺石覆土のほか石室正面や周堀から出土した破片と接合関係にある事から、墳頂に置かれていたと推定される。また、周堀出土の壺は底部ヘラ削りを行う小型の环身である。これら遺物の特徴は7世紀半ばまで遡る可能性を含むものもあるが、本墳の築造時期はK－1号墳より新しい7世紀後半頃と捉えられる。

④K－4号墳の調査

K－1号墳の北東約3m、K－3号墳の北7mに位置する。主体部は横穴式石室だが、墳丘の大部分は調査区外にあるため詳細は不明である。主体部の南西のみ周堀が残っており、その形状から円墳と考えられる。前回調査時には墳丘の遺存は良好とされていたが、現状は竹の根などの攪乱を受けており、辛うじて墳丘の高まりが分かる程度であった。遺物は全く確認されなかった。

墳丘および外部施設

当初、墳丘の盛土と思われていた高まりの大部分は石室に用いられた石材および耕作土であり、それらを除去すると直ちに主体部の壁石や裏込め石が露出するような状況であった。側壁は根石を含め1～2段が残存する程度であった。石室覆土中には人頭大の川原石が集中しており、これは石室内が陥没した空間に周辺の石が投げ込まれたためと考えられる。なお、石室入口の東側に葺石の転石とみられる小振りな石が散在している。周堀はほとんど削平されているが上端幅1.8m、深さ0.3m程度が残っていた。前庭部の有無は不明である。

主体部

自然石乱石積の横穴式石室である。主軸はN－42°－Wにとる。床面には小礫が敷かれ、その下には扁平な舗石が置かれていた。壁石の外側には裏込めとして直径10～20cmの川原石を充填している。確認できる羨道長は2.5m、同幅は1.0m、裏込め被覆を含めた主体部の幅は約3mである。

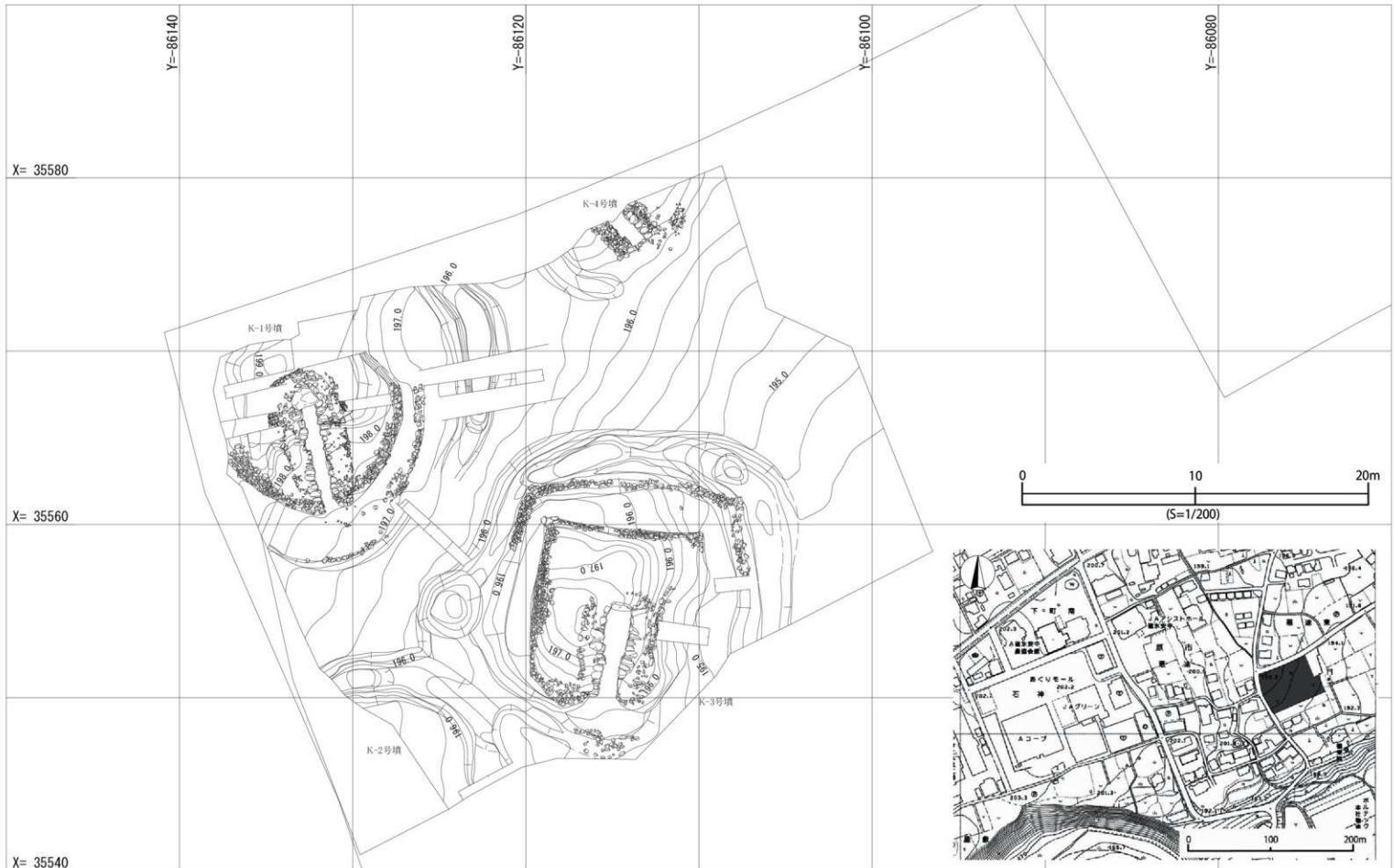
註1：詳細な出土状況や位置は不明だが、悪通地内で水晶製の三輪玉1点が出土したとの記録もあり、装飾大刀を副葬する中～後期の有力古墳の存在が考えられる。また、本遺跡周辺で埴輪を樹立する古墳の存在は知られていないが、過去に周辺で井戸の掘削を行った際に円筒埴輪が出土したとの伝承もあり、かつて崖線付近に後期古墳が存在していた可能性もある。

森田秀策 1964 「古墳時代の文化」『安中市誌』 安中市誌編纂委員会

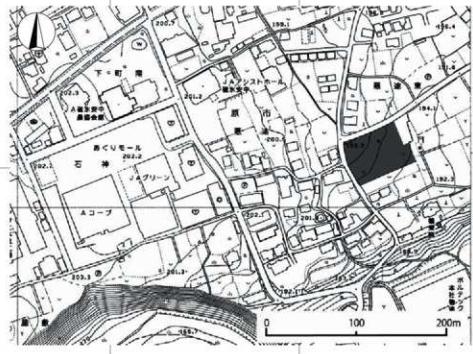
註2：富岡市田篠塚原古墳群の石室調査等で指摘されている。

群馬県埋蔵文化財調査事業団 1998 『田篠塚原遺跡・福島駒形遺跡・福島鹿嶋下遺跡・福島椿森遺跡』

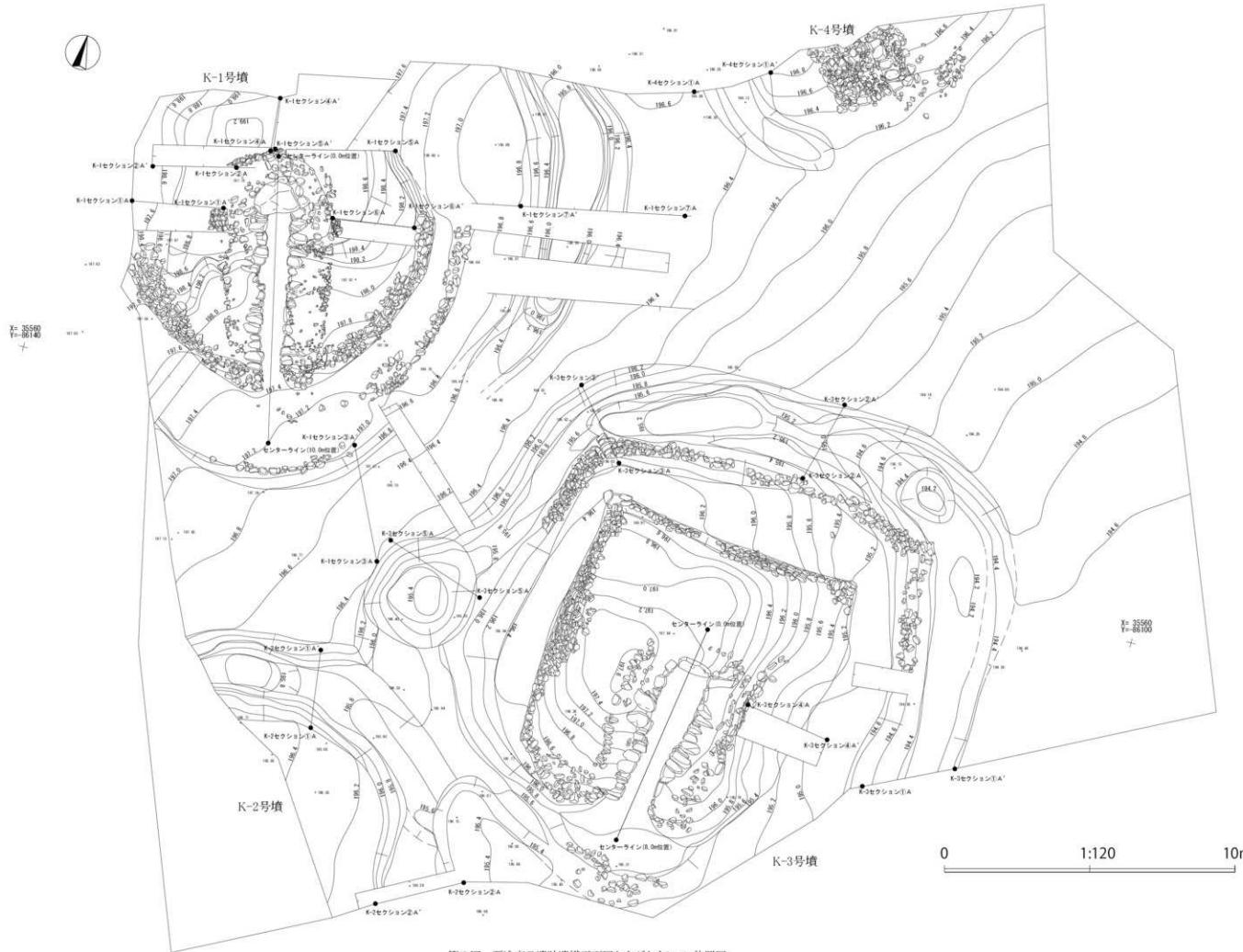
註3：飯田陽一・千田茂雄 2001 「雉子ヶ尾遺跡」『安中市史 第四巻 原始古代中世資料編』 安中市



第4図 悪途東II遺跡 遺構全体図 (1/200)

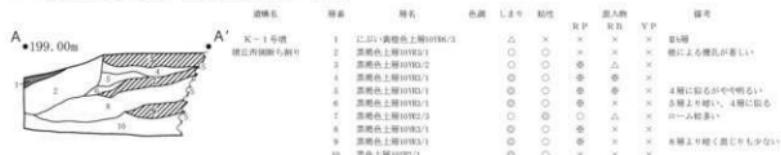


第5図 悪途東II遺跡 調査区位置図 (塗りつぶし部分)



第6図 悪途東II遺跡遺構平面図およびセクション位置図

1 K-1号墳セクション①(埴丘西側断ち割り・北壁)



2 K-1号墳セクション②(埴丘西側奥壁寄り断ち割り・南壁)



3 K-1号墳セクション③(主体部正面東側・東壁)



4 K-1号墳セクション④(埴丘北側断ち割り・東壁)



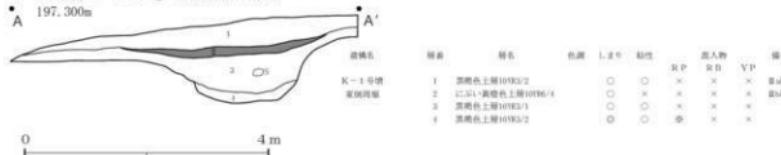
5 K-1号墳セクション⑤(埴丘東側奥壁寄り断ち割り・南壁)



6 K-1号墳セクション⑥(埴丘東側断ち割り・北壁)



7 K-1号墳セクション⑦(東側周堀・南壁)



0 4 m

第7図 惑途東K-1号墳セクション図および土層注記

1 K-3号墳セクション①(東側周堀・北壁)



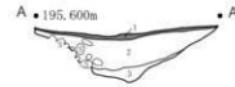
遺構名	層番	層名	色調	しまり	粒性	R.P.	R.B.	V.P.	備考
K-3号墳 東側周堀	1	明黄色土層10YR6/6	×	×	×	×	×	×	BB層
	2	黒褐色土層10YR2/2	○	○	△	×	×	×	

2 K-3号墳セクション②(北側周堀・東壁)



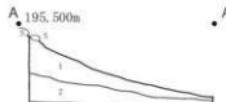
遺構名	層番	層名	色調	しまり	粒性	R.P.	R.B.	V.P.	備考
K-3号墳 北側周堀	1	黒褐色土層10YR2/2	○	○	△	×	×	×	
	2	黒褐色土層10YR2/2	○	○	△	×	※	中	

3 K-3号墳セクション③(北東コーナー部周堀・東壁)



遺構名	層番	層名	色調	しまり	粒性	R.P.	R.B.	V.P.	備考
K-3号墳 北東コーナー部周堀	1	にじく黄褐色土層10YR6/4	×	×	×	×	×	×	BB層
	2	黒褐色土層10YR2/2	○	○	△	×	×	×	
	3	黒褐色土層10YR3/2	○	○	△	×	※	中	

4 K-3号墳セクション④(填丘東側断ち割り・北壁)



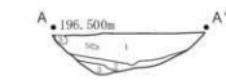
遺構名	層番	層名	色調	しまり	粒性	R.P.	R.B.	V.P.	備考
K-3号墳 填丘東側断ち割り	1	黒褐色土層10YR3/1	○	○	×	×	×	×	
	2	黒褐色土層10YR3/2	○	○	△	×	×	×	○→△を含む

5 K-3号墳セクション⑤(西側周堀・北壁)



遺構名	層番	層名	色調	しまり	粒性	R.P.	R.B.	V.P.	備考
K-3号墳 西側周堀	1	にじく黄褐色土層10YR6/4	×	×	×	×	×	×	BB層
	2	黒褐色土層10YR3/1	○	○	△	×	×	×	済東部片含む
	3	黒褐色土層10YR3/2	○	○	△	×	×	×	

6 K-2号墳セクション①(北側周堀・東壁)



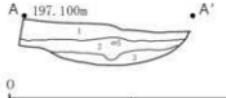
遺構名	層番	層名	色調	しまり	粒性	R.P.	R.B.	V.P.	備考
K-2号墳 北側周堀	1	黒褐色土層10YR3/1	○	○	△	×	×	×	
	2	黒褐色土層10YR3/1	○	○	△	×	×	×	
	3	明黄色土層10YR6/6	○	○	○	×	×	×	地山駆り透かし

7 K-2号墳セクション②(東側周堀・南壁)



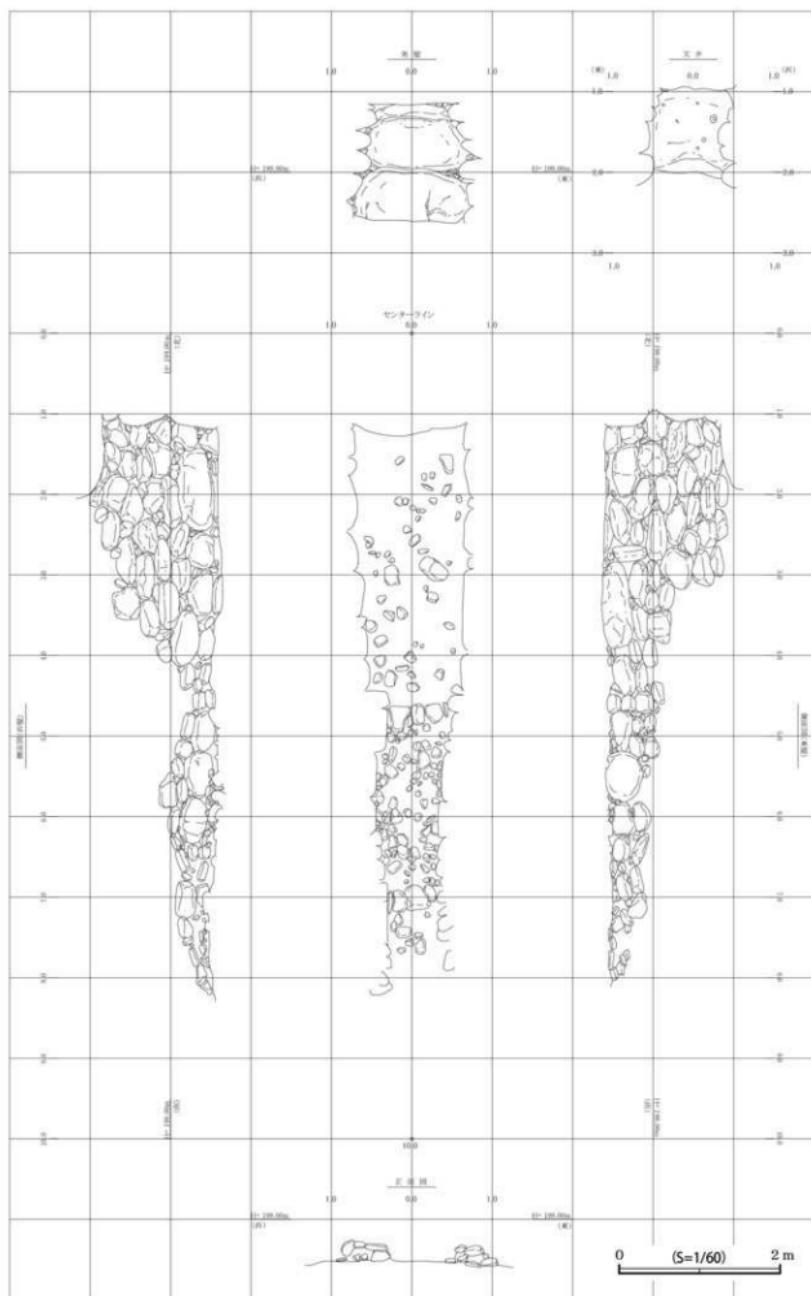
遺構名	層番	層名	色調	しまり	粒性	R.P.	R.B.	V.P.	備考
K-2号墳 東側周堀	1	黒褐色土層10YR2/1	○	○	△	×	×	×	
	2	黒褐色土層10YR2/2	○	○	△	×	×	×	
	3	黒褐色土層10YR2/2	○	○	△	※	※	※	

8 K-4号墳セクション①(東側周堀・北壁)

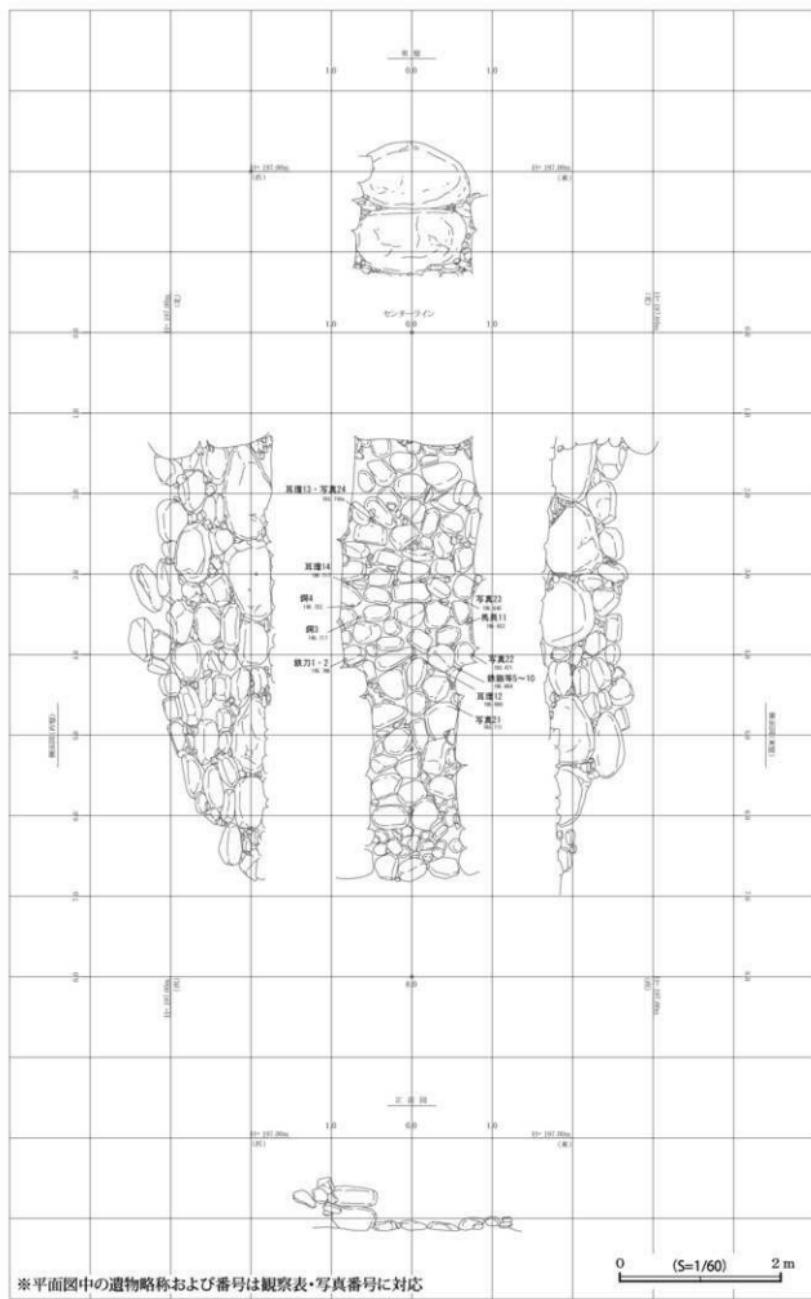


遺構名	層番	層名	色調	しまり	粒性	R.P.	R.B.	V.P.	備考
K-4号墳 東側周堀	1	黒褐色土層10YR2/2	○	○	△	×	×	×	BB層
	2	黒褐色土層10YR2/2	○	○	△	×	×	×	
	3	黒褐色土層10YR2/2	○	○	△	※	※	※	

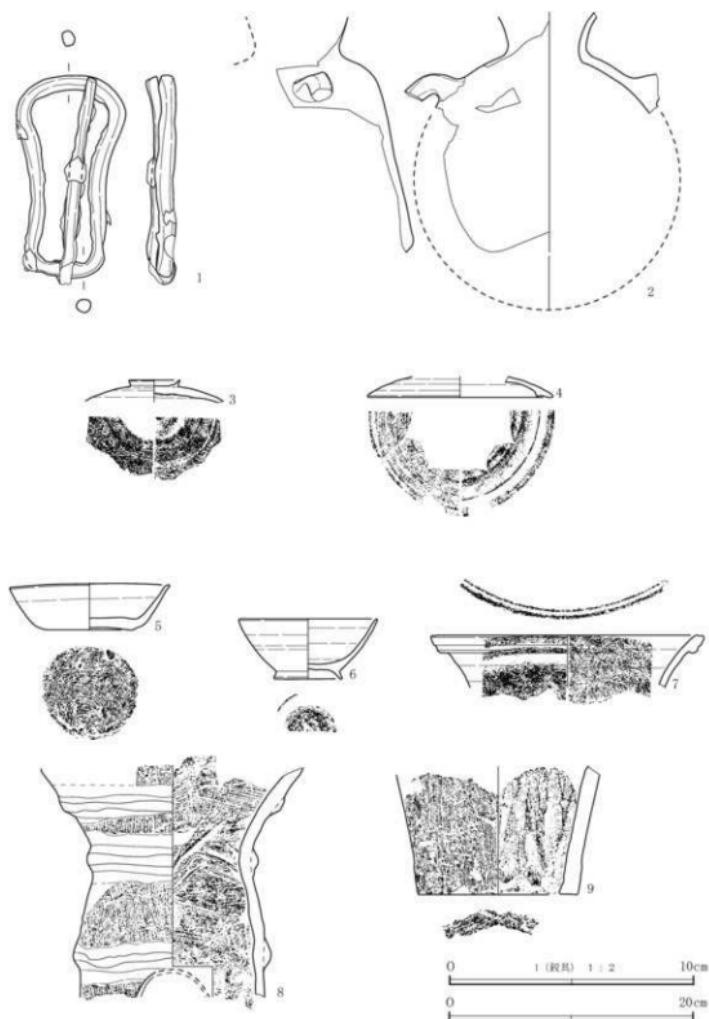
第8図 惑途東K-3・2・4号墳セクション図および土層注記



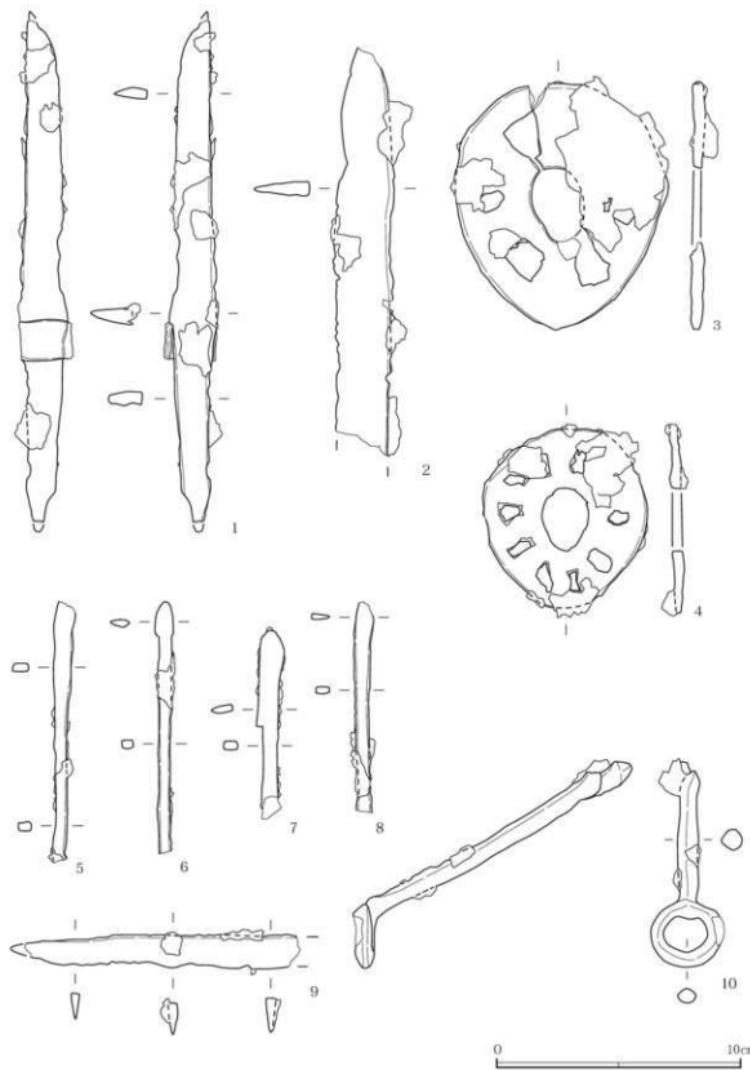
第9図 K-1号填石室展開図



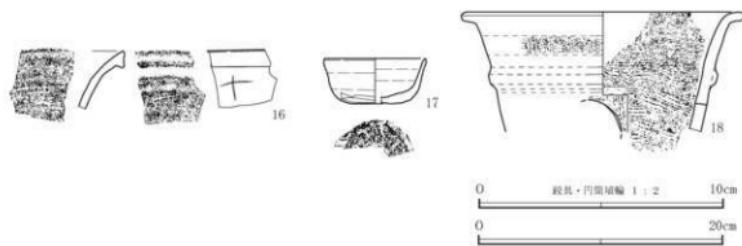
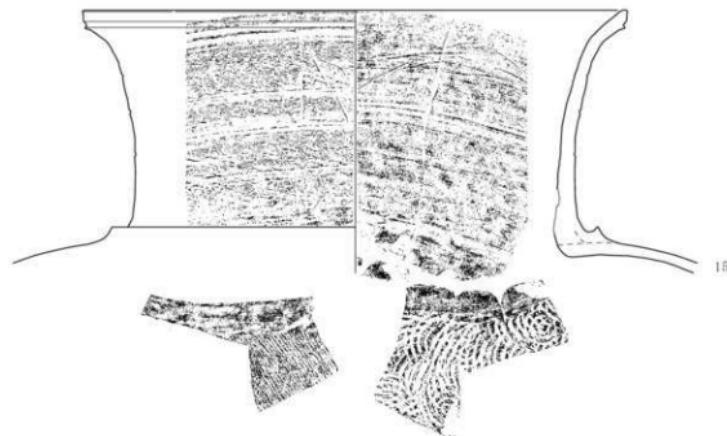
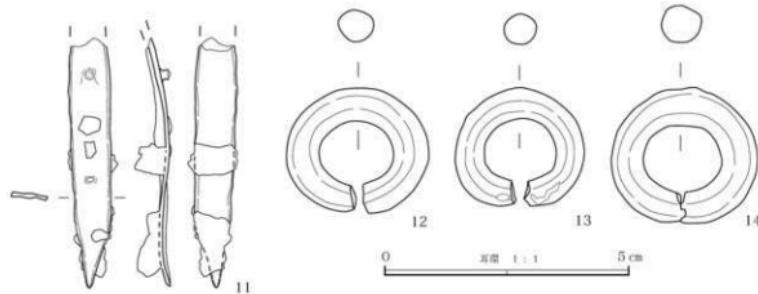
第10図 K-3号填石室展開図



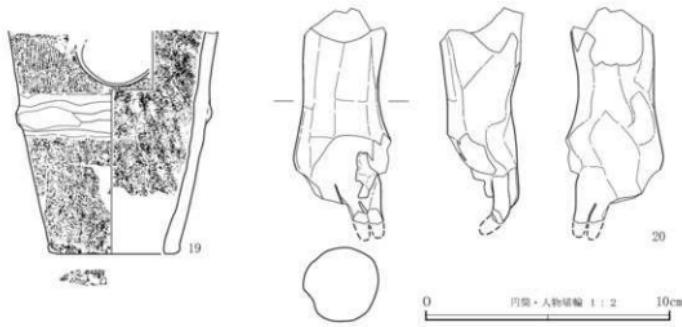
第11図 K-1号墳出土遺物実測図



第12図 K-3号墳出土遺物実測図(1)



第13図 K-3号墳出土遺物実測図(2)



第14図 K-3号墳出土遺物実測図(3)

番号	種類	法長(cm)	色調	状況	成形・調型	備考
1	馬具 韁帶	長さ: 8.5 幅: 4.5 重さ: 45.0g	—	—	やや馬頭形状の鍔具である。基部には斜面を巻き付けている。	馬頭覆土中
2	須留 環帯	—	灰色	良好	頭部径4cm、底部は円形板と板で形成した後、斜上縫を巻き付けて頭部を作る。頭部から1cm程の立ち上がりは斜上縫で「く」の字形を呈す。頭部に環状と思われる把手をもつ。	地土に白堺を多く含む。上下段落土石室正面、7世紀代?
3	須留 環帯	—	灰色	良好	つまみ径42mm、幅のつまみは直立気塊に立ち上がり、端部は薄い。表面へラ削りに伴う段が隣間に残る。ロクロ成形。	下段落土石室中、8世紀前半?
4	須留 環帯	直径: (15.2) 底径: (11.7)	灰色	良好	ロクロ成形。かえりの突出は短く、口縫端部の内側に収まる。	3の須留器蓋に比べて、ややふくらみをもつ。8世紀前半?
5	須留 環帯	直径: (13.2) 底径: 7.0 高さ: 3.8	灰色	良好	ロクロ成形。外側面とも回転模様。底部は回転め取り。外縫口縫から体部にかけてオーリーブ色の自然釉が顔する。筋に含まれる黒褐色の発光が顔者。	秋葉堂宝塚。上段落土石室中、8世紀半ば?
6	須留 環	直径: (11.4) 底径: 5.6 高さ: 4.9	灰色	良好	ロクロ成形。外側面とも回転模様。底部は回転め取り後、付け高台	高台付省略。秋葉堂宝塚。 石室正面覆土中、8世紀半ば?
7	須留 質	直径: (22.4) 底径: (14.3)	灰色	良好	口縫から頭部のみ残存。ロクロ成形。	外縫オーラー黒色の自然釉が顔かる。
8	明脚形 鉤輪	—	淡褐色	良好	体部から頭部のみ残存し、頭部のくびれは強い。明脚部は低三角～低台形を呈し、ナデ付けも薄い。透孔は円形で段階的の上層に穿つ。外面タテハケ11～12本/2cm、内面縦方向ナデ。頭部より上に斜タテ	下段落土石室中、 6世紀後半
9	円筒埴輪	直径: (13.0) 高さ: (10.5)	淡褐色	良好	基底部のみ残存。外面タテハケ15～16本/2cm、内面縦方向ナデ	下段落土石室中、 6世紀後半

第1表 K-1号墳出土遺物観察表

番号	種類	出土位置	残存長(cm)	残存幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
1	跳刀	玄室	20.0	1.9	0.6	36.0	茎から刃先のはぼ先端まで残存する。刀身は造りで圓は切削と思われる。跳刀の鈎員が半分ほど残り、断面は明脚を呈する。半径8.1cm、半幅1.4cm、厚さ0.6cm
2	跳刀	玄室	16.8	2.3	0.6	58.0	刀身のみ残存し刃先をなく。刀身は半造りで圓は無理と思われる。
3	跳刀	玄室	10.1	8.7	0.6	92.0	跳刀の頭部、側頭部を呈し、六密頭をもつ。
4	跳刀	玄室	7.3	6.7	0.5	43.0	跳刀の頭部、側頭部を呈し、十密頭をもつ。
5	跳刀	玄室	10.7	0.8	0.4	8.0	跳刀片刃部のみ、刃片10.0cm、刃幅0.8cm、貫通部長9.7cm、同幅0.6cm。
6	跳刀	玄室	10.3	0.8	0.4	9.0	跳刀片刃部のみ、刃片10.4cm、刃幅0.8cm、貫通部長9.0cm、同幅0.5cm。
7	跳刀	玄室	7.9	1.1	0.4	7.0	跳刀片刃部のみ、刃片9.1cm、刃幅1.1cm、貫通部長3.8cm、同幅0.6cm。
8	跳刀	玄室	8.6	0.8	0.3	5.0	跳刀片刃部のみ、刃片9.3cm、刃幅0.8cm、貫通部長7.3cm、同幅0.5cm。
9	刀子	玄室	11.3	1.4	0.4	14.0	刃片は残していないが、茎中付近六密は欠損する。圓の形状は不明。
10	馬具轉	玄室	11.5	引手部0.0	0.9	41.0	轉の引手部分、振りは残されていない。
11	馬具轉	玄室	10.2	1.7	0.3	14.0	馬具頭部のみ、下端のU字形を呈する骨具と思われる。
12	耳環	玄室	2.9	1.5	0.7	19.0	やや馬頭形を呈する。馬頭金剛輪りと記されるが、ほとんど剥落している。
13	耳環	玄室	2.6	1.4	0.7	13.0	やや馬頭形を呈する。馬頭金剛輪りと記されるが、ほとんど剥落している。
14	耳環	玄室	3.0	1.6	0.8	20.0	やや馬頭形を呈する。馬頭金剛輪りと記されるが、ほとんど剥落している。
15	馬具轉	玄室	引手部分 11.7	引手部0.0	1.0	182.0	馬具頭部のみ、下端のU字形の金具を呈する骨具と思われる。写真21に対応。
16	馬具轉	玄室	12.0	U字金具3.1	鈎部分0.9	88.0	馬頭の一部、頭部はU字形の金具を呈する骨具と思われる。写真22に対応。
17	馬具轉	玄室	20.0以上	U字金具3.1	鈎部分1.0	183.0	馬頭の一部、2連の頭部のうち前にU字形の金具を呈する骨具と思われる。上端には骨具が連結される。これらは、引手部と頭部が剥落して、馬刀等が挿入された現状で残っていた。全体の形状は不明。1条または2条以上の骨具を複数に有する。金剛輪。写真24に対応。

第2表 K-3号墳出土遺物観察表①

番号	面種	法線(cm)	色調	模様	成形・調形	備考
15	直底器蓋 身	口径:(9.4) 底径:(2.4)	灰色	良好	口縁から底部まで約1/4周現る。外面に4部カ斗形調査溝。沈幅で4段に区切る。縁上段から2・1・2・1の波状文を施す。底部に断面二重形の被覆部。	背面斜部平行引き目。内側向心円弧アテ目。 上段斜石覆土中+石室正面+商標。7世紀後半?
16	直底器蓋 身	口径:(—) 底径:(—) 高さ:(4.7)	灰白色	良好	ロクロ成形。外面に「十」字形のヘラ記号がある。	一部外面にオリーブ色の自然軸がかかる。 石室正面
17	直底器蓋 身	口径:(8.4) 底径:(4.0) 高さ:(3.7)	灰色	良好	ロクロ成形。底部は丸みを帯び、手持ちへラ削りを行う。口縁部は直線的に広がる。対となる基部には宝珠状のつまみが付くか?	内側斜面露土中。7世紀半ば?
18	円筒埴輪	口径:(23.2) 底径:(—) 高さ:(9.8)	淡褐色	良好	口縁と2段目の中位まで現る。縁上段は短く、口縁部は強く外反する。透孔は円形。突端断面は低い台形でナデ付けは丁寧である。外面タケハケ、ハケ目9~10本/2cm、内面部ハケ。	2集3段。砂隕、チャード、白色を多く含む。石室覆土中。6世紀後半
19	円筒埴輪	口径:(—) 底径:(10.8) 高さ:(18.3)	淡褐色	良好	最下段と2段目中位まで現る。基部は粘土板で成形。透孔は円形。突端断面は低い台形でナデ付けは強である。外面タケハケ、ハケ目14~15本/2cm、内面部は斜ハケ後斜ナデを施す。	2集3段。砂隕、チャード、白色を多く含む。石室覆土中。6世紀後半
20	人物埴輪脚	口径:(—) 底径:(—) 高さ:8.9	淡褐色	良好	棒状の黏土で脚を表現し、さらに平たく押し潰すことによって手足を表現している。脚筋だけは黒い粘土を張り付け。他の部位は粘土に切り込みを入れて表す。ナデ整形。	焼作不明。上段真石覆土中。 6世紀後半

第3表 K-3号墳出土遺物観察表②

	K-1号墳			K-3号墳		
	計測値(cm)	復元式(高さ)	復元式(底)	計測値(cm)	復元式(高さ)	復元式(底)
石室全長	690	19.7	23	550	15.7	18.3
玄室長	410	11.7	13.7	280	8	9.3
玄室幅	110~140	3.1~4	3.7~4.7	140~160	4~4.6	4.7~5.3
奥道長	380	10.9	12.7	270	7.7	9
奥道幅	80	2.3	2.7	110	3.1	3.7
玄室高	140	4	4.7	(150)	(4.3)	(3.9)
奥道高	80	(2.3)	(2.7)	(110)	(3.1)	(3.7)
埴丘径①	1800	51.4	60	1350	38.6	45
埴丘径②	2400	68.6	80	1800	51.4	60

※()内の数字は平均値

※高さ式=35cm、直径式=30cmで計算している

※復元式の値は小数点第2位を四捨五入した

※埴丘径①は下段埴丘の根石から、埴丘径②は弱冠外側の上端から測った数値

第4表 K-1・3号墳石室規模計測表

第5章 成果と問題点

悪遠東古墳群はかつて総数7基以上が存在したと考えられる終末期古墳群である。既に破壊されたものもあるが、今回の調査では4基の古墳について不十分ながら一応の成果を得る事ができた。以下、調査所見を踏まえ本古墳群の性格について若干の考察を加えたい。

まず、古墳の築造時期・順序について考えてみたい。調査を行った4基はいずれも埴輪を有していない点、石室の形態や遺物等の特徴から7世紀初頭以降の築造と推測される。2・4号墳については部分的な調査に止まり、遺物の出土もなく全体像は把握できないが、古墳の立地状況や規模等を勘案すれば当然、同一古墳群を構成するものと考えられる。個々の築造時期を考える際に墳形の差が年代差を反映するか否かは別として、1号墳と3号墳を比較した場合、墳丘・石室の規模共に1号墳の方が上回り、盛土や石積み等の構築法をみて前者の方がより“入念な”つくりをする印象を受ける。

一方、遺物をみると1号墳は石室内出土のものは鉢具のみであるが、埴丘覆土中の須恵器环蓋は口径が大きく環状つまり有し、碗は断面三日月形の高台をもつ点等から7世紀末から8世紀前半頃の年代感を示す。出土位置を鑑みれば、これらは追葬または追善供養の際に供された可能性も有り得るが、1号墳の築造は7世紀後半と考えたい。

次に3号墳だが、前述通り1号墳に比べて小型化・構造の簡略化傾向が認められる。石室内は盗掘被害を受けていたにも関わらず少なくとも直刀二振・馬具一組・鉄鎌10本以上・耳環等の多様な副葬品が残されており、同時期における碓氷川流域の古墳の中でも一際目を引く。周囲覆土中に転落していた須恵器环身は小型で底部窪削りを施しており、未検出であったが対となる环蓋は宝珠状の摘みが付くものであったと推測され、その年代観は7世紀半ばと思われる。また、

鉄鎌は鋒化が激しく全形を留めるものは少ないが、刃部の形態は両刃と片刃のものが両存している。1号墳とは遺物量・種類が異なるため単純比較はできないが、遺物の形態をみると同時期か或いは若干古相を示すものも見受けられる。しかし、石室形態を比較すると次世代とまでいかなくとも1号墳より新しい要素をもつ部分も多い事から、3号墳の築造年代も（1号墳に後出する）7世紀後半と考えたい。また、隣接するK-2・K-4号墳については検討材料が少ないので、前述の2古墳と比較して大きく迥るような特徴は見受けられず4号墳の石室もかなり小さいと考えられる事などから、やはり相前後する7世紀後半～8世紀前半頃の築造と推定される。

さて、本古墳群が形成された7世紀後半における群馬県内（上毛野）の古墳の社会的序列を考えた時、その頂点に位置するのは前橋市の総社古墳群中にある宝塔山古墳（60m）と蛇穴山古墳（39m）の二大方墳を奥津城とする一族であった事は古墳の規模や作造からも明らかであると古くから指摘されている。また、西に近接して造営された山王庵寺の石製品製作・加工技術はこれら方墳の築造技術と共通点が多く、両者の深い関係が垣間見える。県内他地域に目を向けると、太田市の巖穴山古墳（36m・方墳）の近くには川原寺式の軒丸瓦を使用する寺井庵寺が、二重の周囲を有し石室の基礎に版築を施す伊勢崎市の祝堂古墳（30m・円墳）や唐三彩を出土した多田山12号墳（34m・円墳）の近くには伽藍配置が分かっている上植木庵寺が位置するなど、地域の有力古墳の近くに古代寺院の存在が確認できる例が幾つかある。寺院の近くには国衙や郡衙といった公的施設の立地が推定される例も多く、これらを総合して検討する事は被葬者の系譜を考える上でも重要である。

本古墳群と同時期に安中・原市台地から川を隔てた北にある秋間丘陵では須恵器や瓦の生産が開始され（秋間來古窯跡群）、前述の山王庵寺に瓦を供給するようになる。当地域ではそれまで目立った古墳は無かったが、この時期から急に小丘陵の頂上や見晴らしの良い緩傾斜地に古墳が造られるようになる。規模こそ小さいものの、宝塔山古墳と同じ複室構成の截石切組積両袖型石室を有するおと塚古墳（20m・円墳）や截石切組積両袖型石室を主体部にもつ二軒茶屋古墳（20m・円墳）、万福原古墳（20m・円墳）などがこれに該当し、秋間丘陵の古墳の被葬者は総社古墳群の勢力と密接な関係の下に成立した秋間古窯跡群の操業集団であったと考えられる。

一方、悪途東古墳群K-3号墳は截石切組積石室を採用しないが、これは石材採取の難易に起因するとも考えられる。しかし墳形において当時の最高位に位置する方墳を採用する点は当然、その被葬者は総社古墳群の勢力下に置かれた人物であると考えざるを得ず、秋間丘陵の古墳被葬者とは別の形で上毛野中枢と関わりのあった豪族だったのだろう。残念ながら市内では未だ庵寺や官衙跡は確認されていないが、本古墳群から北東に約1.5kmの台地北側斜面に位置する植松地尻遺跡では複数の掘立建物跡が検出され、遙方や「評」と刻書された須恵器坏蓋（秋間産）といった官衙遺構に関係するような遺物が見つかっている。勿論、直ちにこれを官衙と捉える事はできず、仮にそうであったとしても古墳との関係を証するものは無いが、県内同時期の方墳を含めた有力古墳とそれを取り巻く環境を考えれば十分注意される事象だと思われる。以上、殆ど報告のみに終始し個々の詳細な検討については不十分な観はあるが、今後の調査例増加を期しつづけ筆を置くこととしたい。

主な参考文献

- 尾崎喜左雄 1977 『上野国の古墳と文化』 尾崎先生著作集第三巻 尾崎先生著書刊行会
右島和夫 1994 『東国古墳時代の研究』 学生社
群馬県古墳時代研究会 1996 『群馬県内出土の馬具・馬形埴輪』 群馬県古墳時代研究会資料集第2集
群馬県古墳時代研究会 1998 『群馬県内の横穴式石室I（西毛編）』 群馬県古墳時代研究会資料集第3集
早稲田大学・明治大学文学部考古学研究室 2004 『古墳から寺院へ 一関東の7世紀を考える—予稿集』
第5回大学合同考古学シンポジウム実行委員会
安中市教育委員会 1988 『悪途東遺跡』

写 真 図 版

目 次

- P L. 1 K-1号墳石室正面および前庭部（南より）
K-1号墳石室調査前状況（南より・表土除去後）、K-1号墳石室全景（南より）
K-1号墳玄室奥壁（南より）、K-1号墳墳丘全景および裏込め状況（東より）
- P L. 2 K-1号墳セクション①（南より）、K-1号墳セクション①裏込め被覆状況（西より）
K-1号墳セクション④（東より）、K-1号墳セクション⑤（北より）
K-1号墳セクション⑥（南より）、K-1号墳セクション⑦（北より）
K-1号墳漢道閉塞石残存状況（南より）、K-1号墳馬具出土状況
- P L. 3 K-3号墳石室正面（南より）
K-3号墳墳丘全景（東より）、K-3号墳墳丘全景（北西より）
K-3号墳石室床面検出状況（南より）、K-3号墳玄室から漢道を望む（北より）
- P L. 4 K-3号墳漢道閉塞石残存状況（北より）、K-3号墳玄室右側壁鉄錆固着痕（写真中央右・西より）
K-3号墳玄室奥壁および右側壁近景（南より）、K-3号墳セクション③（東より）
K-3号墳セクション⑤（南より）、K-3号墳セクション④（南より）
K-3号墳セクション④（墳丘断ち割り・東より）、K-3号墳玄室左側壁近景（埴輪混入状況・東より）
- P L. 5 K-3号墳玄室内遺物出土状況（左側壁、写真左は鉄刀・同中央に蹲・同右に耳環）
K-2号墳セクション①（東より）、K-4号墳全景（南より）
K-4号墳石室近景（南より）、悪途東II遺跡調査風景（K-3号墳）
- K-1・K-3号墳出土遺物写真



K-1号墳前庭および前底部（南より）



K-1号墳石室調査前状況（南より・表土除去後）



K-1号墳石室全景（南より）



K-1号墳玄室奥壁（南より）



K-1号墳墳丘全景および裏込め状況（東より）

P L . 2



K-1号墳セクション①（南より）



K-1号墳セクション①裏込め被覆状況（西より）



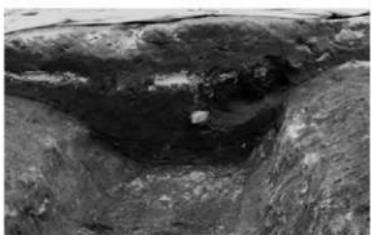
K-1号墳セクション④（東より）



K-1号墳セクション⑤（北より）



K-1号墳セクション⑥（南より）



K-1号墳セクション⑦（北より）



K-1号墳渓道閉塞石残存状況（南より）



K-1号墳馬具出土状況（上に見えるのは渓道右側壁）



K-3号埴石室正面（南より）



K-3号埴丘全景（東より）



K-3号埴丘全景（北西より）



K-3号埴石室床面検出状況（南より）



K-3号埴玄室から狭道を望む（北より）



K-3号填渓道閉塞石検出状況（北より）



K-3号填玄室右側壁鉄製品固着痕（写真中央右・西より）



K-3号填玄室奥壁および右側壁近景（南より）



K-3号填セクション③（東より）



K-3号填セクション⑤（南より）



K-3号填セクション④（南より）



K-3号填セクション④填丘断ち割り（東より）



K-3号填玄室左側壁近景（覆土埴輪混入状況・東より）



K-3号墳玄室内遺物出土状況（鉄刀・鐸・耳環）



K-2号墳セクション①（東より）



K-4号墳全貌（南より）

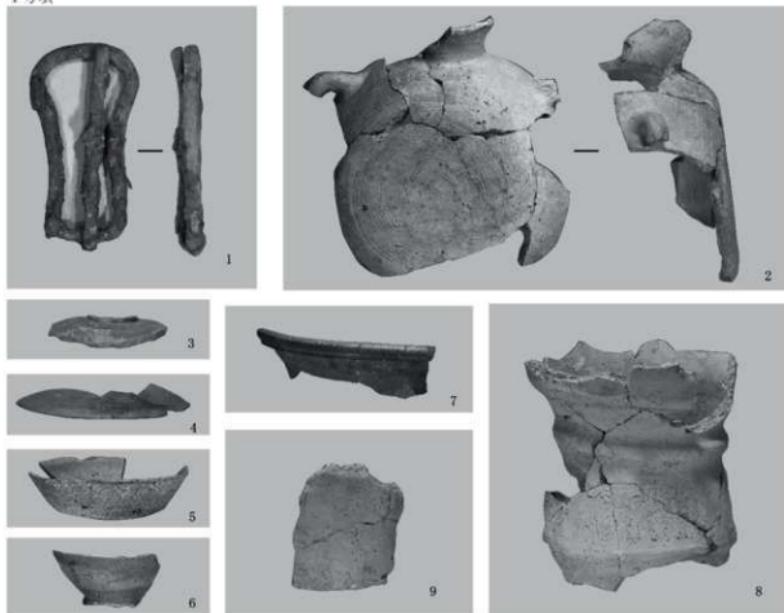


K-4号墳石室近景（南より）

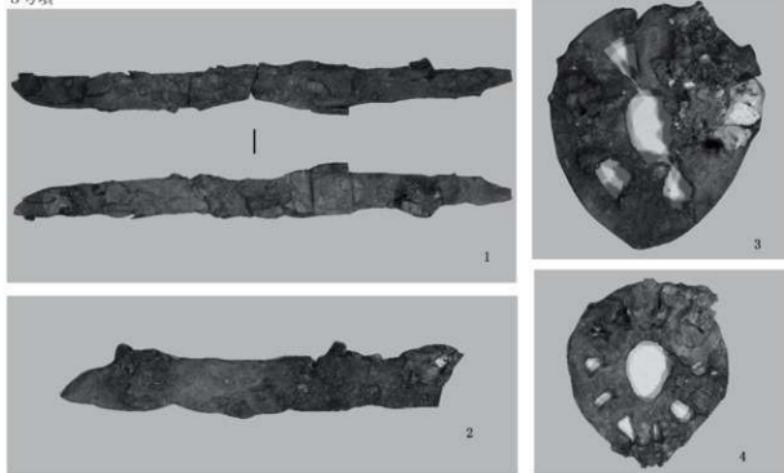


惡途東II遺跡調査風景（K-3号墳）

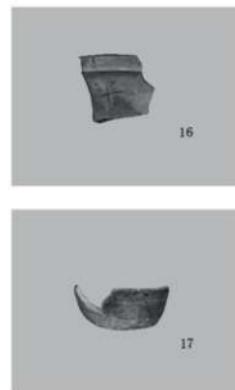
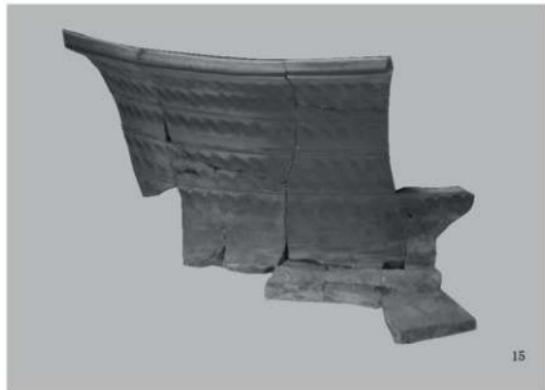
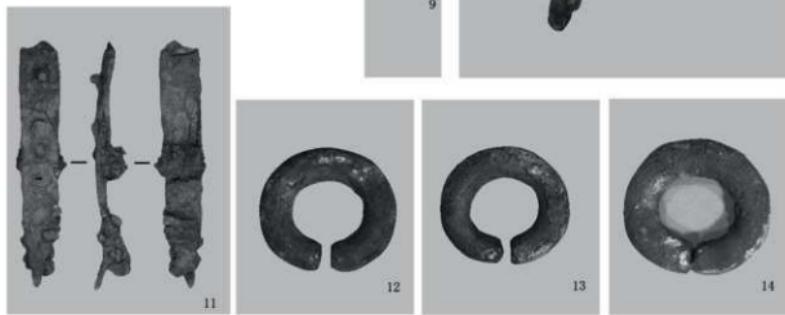
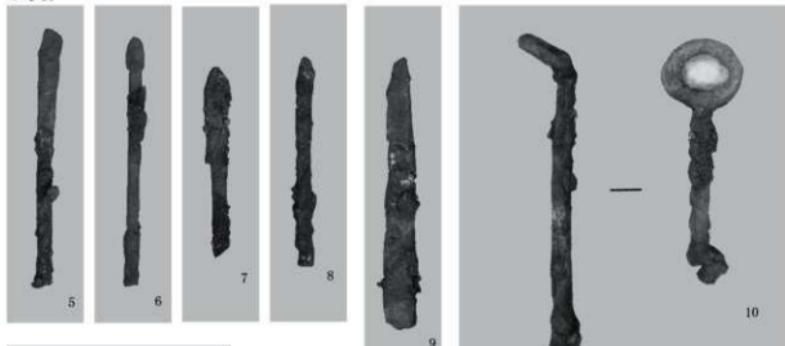
1号墳



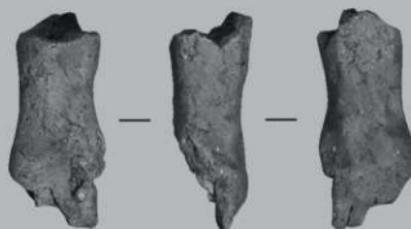
3号墳



3号填



3号填



発掘調査報告書 抄録

ふりがな	あくつひがしにいせき
書名	悪途東II遺跡
副書名	分譲住宅造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ番号	
編著者名	菅原 龍彦
編集機関	安中市埋蔵文化財発掘調査団
編集機関所在地	379-0292 群馬県安中市松井田町新堀245（安中市教育委員会内）電話 027-382-1111
発行年	西暦2012（平成24年）12月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ° °	東経 ° ° °	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
悪途東II遺跡	安中市中野町 字悪途東492番地1他	102113	C-25	36°19'00"	138°52'27"	20120413～ 20120528	1503m ²	分譲住宅造成に 伴う工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
悪途東II遺跡	古墳	古墳時代	古墳4基	須恵器・鉄製品・ 耳環・埴輪	方墳、円墳から構成される終末期 古墳群

悪途東II遺跡

一分譲住宅造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一

発行日 平成24年12月28日

編集・発行 安中市埋蔵文化財発掘調査団
群馬県安中市松井田町新堀245
(安中市教育委員会内)

印 刷 朝日印刷工業株式会社
群馬県前橋市元総社町67